

「オレスティア」三部作（アイスキュロス） 承前

夫アガムノーンを殺したクリュタイメーストラは情夫アイギストスと共にアルゴスの王權を恣にするが、實はアイギストスの父とアガムノーンの父とは兄弟で、王位を繞つて争ひ、アイギストスの父が敗れて二人の息子の肉を食はされた。一人逃れたアイギストスはクリュタイメーストラを誘惑してアガムノーン殺害に加擔し、父の代以來の宿恨を晴したのであつた。

八年後、國外に追放されてゐたアルゴス王子オレステースがアポロン神に命じられ、父の仇を討つ爲に故國に戻る。長老達のコロスは歡喜して云ふ、「家代々の所業によつて流された血の償ひを、あらたな血の裁きによつて、遂げさせたまへ。どうか古びた昔の血が、もう二度と、この家に子を産」む事の無い様に。

即ち血が血を呼ぶ呪はれた王家に「あらたな血の裁き」を齎すべく、オレステースは歸還する。

そして懊惱しつつもクリュタイメーストラと對決し、「よいのか、母の怒りの化身の犬どもが、襲ひかかつて」と叫ぶ母に、「あなたは、殺してはならぬ人を手にかけて」、「この務めをおこたれば、父の怒りの犬どもから逃れる道」はないとて、母を殺す。

だが、彼は己が正義を信じつつも、自らの流した「血の穢れ」に戦^{その}き、アポローン神の在^{いま}すデルポイ神殿に「歎願の旅」に出ようとす。すると、「母の怒りの化身の犬ども」の大群が「目玉から、ぼたぼたと、血」を流して迫つて来る。母を殺した息子に「太古よりの掟の道」即ち「血の償ひ」を求める復讐の女神エリュニエスの群だ。オレステースはデルポイに逃れアポローン神に縋^{すが}るが、復讐の女神は追ひ縋り、飽迄「血の償ひ」を求めて已まない。

そこでアポローン神はアテーナイの守護神アテーナー女神にポリスの選良からなる裁判を開かせ、オレステースの行爲の正邪を裁判で決する様に計らふのだが、裁決の結果は正邪同數となり、法的慣例に従ひオレステースは無罪放免となる。譯者によれば、これは「私怨による應報の思想」に齒止めをかけ、それを「法的な慣例によつて理性の力で排除」せんとする試みであつた。

然るにエリュニエスは裁決に怒り、アテーナイを激しく呪ふ。するとアテーナー女神が頗

る意外な提案をする。恐るべき「太古の神」たる汝等には、アテーナイの神殿の地下に住み、「慈しみの女神」エウメニデスとなつて、忌はしき「血の償ひ」の連鎖がポリスを破壊する事の無い様に見守つて欲しいといふのだ。アテーナイ女神の考へはかうである、人間は「尊く恐ろしいもの」を夢にもポリスの外に放逐してはならぬ、不安の意識が無くなれば警戒心を失ひ惰眠を貪り、「人の身」の分際を忘れ愚行に耽る、それが人間の常だからだ。復讐の女神は提案を受容れ、慈しみの女神となる。

以上、三部作の第二部「コエーポロイ」及び第三部「エウメニデス」の筋を纏めて紹介したが、結末について「ヒューマニズムの悲劇」にワインシュトゥックが書いてゐる。アテーナイの地下には「怪物たちが眠つてはゐるものの、その眠りは至極浅いので、市民が敬虔な不安に目覚めてゐないと、すぐに目を覺ましてしまふ。その時、禮拜洞はただちにもとの獅子の床となり、裂けた大地は町々を飲み込んでしまふだらう」、人間にとつて最も恐るべき敵は「人間狼そのもの」であり、それに對して「人間はつねに細心の注意を拂はなければならぬ」（榎山欽四郎・小西邦雄譯）。「人間狼」が最も恐るべき敵だといふ現實は、二千五百年前の昔も今も何一つ變りはしない。そしてそれを克服する事の困難も。（久保正彰・橋本隆夫譯、「ギリシア悲劇全集1」、岩波書店）